壽色梅美歸祝

公

へ 13
2902
1

春色梅美婦禰の序

つゆのいろ乃ちぎれ玉

匂ひかをる此外に

梅干が牡丹きさを夜ふ。

白歯の美人張合

玉枝

此書籍ヲ貴部又ハ貴人ニ入ントスル時ハ直チニ御報知ヲモフ
津田安麿

門へ13
號2902
卷1
へ13
2902
15

昭和九年
七月
日
購求

9-9-5
綜

梅の花ちるや今年の春の雨　梅童

よし野中蛍人見ぬやあぎと　真風

美雨や嬉しき雨の小雨雪　羅高

春雨年咲ぶてまぶれ春の雨

兼輔朝臣の歌を使ひ示す

とし年の初鶯や高砂の

歳は高砂の頼みの乃

江戸　人情茶　狂訓亭

為水春水誌

あたの
さもの
けの
かく
きれ
はしり
けり

墨色
入相
餅甘酒

六月朔日浅草の富
士詣隨神門より丸
馬道へいるる圖

春色梅美婦禰巻之一

梅園英對の拾遺

江戸

爲永春水著

第一回

再應說を我愛しまく欲ふ似られど枝うふ枝の花實を
まことしやぐく結ぶわば根ふ継孫の物語り猶況殘せ一一
像を又〻實ふ ちゝはゝさそも意う露ふる豊月みたち
らぐ義合ふ家次第 楓お房の三人を和合ふ合ふと斗ふ
爲めに意ふる米八が好意ふ家ものたゝふ元来無孫

姉妹つまづく縁の筆次郎ハ直ふ酒屋さ人ゐれバ親ふ彦の
西女へ弟ーかどう〜金沢元ゆも仕人が国ふハあるくふ
ゆふ主人き理宮ふハゆうねど姉も妹も心底ふ嘆ふ
猪泉の意の癖ゆ〜ふゆくふ〜ふゆうしゃバ妹て来ハ巷ふ
弟ふ紅楓の泉の上のゆを相談ー金の入用ハ巷ふ弟ゆ
何かどう〜ふも出ぶべーをいつふ任せて主屋ふ別ふる人を
縁くふゆ〜巷ハ弟ふハ弟ふ言ふ親元を抱込ゆ〜ふ紅楓
と廓ふう引ふ〜せさて給金利ふ入用ふ来ふかふ〜ふ

ゐれバ来ふ来ふ嫌ふ〜ふて世ふ出ふふを僥倖と思ひ男の
ゆふ出ふ〜ふゆふ娘ふ川の料理屋の敬吉ふを後の金の
豆ふ来ふ〜ふ動ふさふふ娘ゆ嫁ふのふ人ゐれバと
言ふ〜ふて中宴の中清屋の抱への表向ふ〜ふ芸ひ自身
番横町ふ家を持ふふ自中ふ巷ハ弟ふ変ふ〜ふ
らへける是何ふゐれバ西女の親の扇屋ゐれバ巷ハ弟の
世話ふふ〜ふる心のやどふ親の元ふ来て下面倒ふるふと
のふゆる意路の中ふて おふ房ゆふ義ゆあれバ紅楓を親

元ゆも筆次第の側ともなるべ金とうのとなりての物よ
言うとうと　妙ふハ自せしぞさまとお房ハ姉のもとよ
同居とまでハまごゐ〳〵ぞ叶浸ともに米八が墨堤実志の
世話を使ふふ彼寄場より住居をして内〳〵筆次第ぐ暮と
ゐうはをうけて味ものゝ移屋の汚むめ〳〵うゐぬ移よ
徳を対てつゝ〳〵けるべ姉妹両女とも住居よ月日を
ゐうけ。

紅梅が意が寝と料理屋の喫女とゐうとハ宮易

おゐうハゐうねど夫を未〳〵ゐうと減ハ理屈ふうゐまうとて
婦女子の看官おり〳〵ゐうぐ係〳〵只乃屋もうき風
情よ戻已へ移り住ゐうをゐうとハ側の素気の筆癖と
ゐうし〳〵ゐうゐ

○さてもお房ハ代四代目風邪の脳〳〵ゐうけるべにのうゐを
副〳〵く〳〵新屋ふ残アゐう友傍輩も来ぐゐう員素を
住ゐう上空敷門所の用のゐうもゐうて暫対二階よ引ん
ぐりと背乳析〳〵も貸本屋の持て来ゐう〳〵人情本まゐ人作の

字ふかまとど面白そふな書初よ借て直さんとこうつと夢を
ちらくうぐさいこも又気ふうる表の癖

あるこうハ一人淋しくて眠らまとぬ傍よ文七ハ傍ふあら
三味線をまふとうあげて凡弾ふ

乃人丹者お邪魔のうげぐふうきぐ存ど淋しうう義ふこも
まもあもつ京ま人て音羽の吉ふハ和ふうぐら浄瑠の空
吉ふ居るそらハ泣てぐまとて我傍ふお客を捨くぬ
の側

一間隔て清川ハ耳をそばだて公の中ふ。ヲヤ文さんが
ねふ弾て居るちふぞョト唄の文句を学ふけつふ歌
繰人を薄情も憎れまる人の常。れんふ唄とふあめハ
稽古ちうんざ身の情ふ為ふ百ふ義ふで居
けまど文さんと蕎合さお客ハいつでも素略ふて
後見ぐハ淋敷ちるぐふ傍常元ふも異見をさま
一定の好ふ人者の様子と心を比り来ぐハ
来てもふ対ぬ客とふかどの方でうひが

奉
仲町
御定番
伊ゝ
米八

お房寄場ホ
物の本を
讀所

酒機嫌ようく家のを幸ひ宅迄一緒なる人
ト謂ふもいの中 安めの為よ 淋しゐる人を慰めう
うと又夫婦して 文七の 奉ふいうて 鼻を雪隠 一文さん
ヨやうう二三味線ハお止の人 自ぜ 酒息を吐て手拍ふ
贅情でお主ご 今日も 奴使の人がいつよハ花四さん
とのふ 女郎衆 うもぬしの新人手紙が出ることのを
突きまこう先初まで 毛ろく 気がゆめて 少しく思うて
居ンざぬをそうやう 私の拍子ものざるをとう

ねしの気ふも不入 他ハ愛男ハ 獨が出来さしこ雨
ハ 恋でも止く 吳るのを拍子ハ ありいせんが 幸
初をまうこで捨て 体まうといふ 気ふ ちやうちやう
拍子 後生ざるまョ 文へ ゆくうとまうしてまつり
まこと 清へアサ おちやうしでるハ 実ハ 毒度ざる
まョ 文へアイヨ 大丈夫ぶう 手拍子 取戦 苦労を 体
さんるヨトやきこ 気
お房ハ 懐 ケしゞ 鼻 ふ きゞ 引 ゞ 哀 の

初まる仏根ハ誰もうらゝぬ憂苦労別く竹臭ハ姉しらず
人の家初うゝ在ぞゝも初ゝで男のとうち分ふいて姉の
接拶を国その後ゝ浅くと姉ゞ結びゝ縁の糸義理と
世間の男くゝを恥くハ香ゝも竹糸の切ねばるゝね妹の身
弱ふ拶き人濃ある中の高味き人あるものを奏の糸しく
義人バとそ絶遂らまゝぬ二人が中他人の臭まそ在るゝで
男一人を両婦そうゞくゝるも世の中ふゝ人見間も
まるゝゝれバ和ゝうゝね所ゐるゝと勝まにふてもゝ

べきゞ扇屋仏の母のゝれふゝるゝ変ゝ人あゝ手ゞとゝ人を
見て今更ふ離別拶ゝハ言ゝも世を言も悲ゝふ仏の底ゝ俗
拶しゝ社らふと見業ふふまゞる猫の中涙を舞ふの上
文字も純潔をうゝむらん新て手用も義ゝてく出人せらゝき
路次の見青明て来るゝゝ見板の迷ゝと見ふ人おゝのゝ
仏の面の変ゝ寄寄場のゝるゝ楽屋ハ兵の娘の
寄合ゝゝ人バ年の数ゝゝれて女房といゝゝく女でも自ゝゝる
あゞけゝき文を悪ふふゝ第ハ仮娘ゝゝふゝゝゝ待て

完全なる人間再生の眉毛の逆立て白歯がさびて黴いろ
乳首がちぢびて皺があるのと陽に焼けなほ方もものまど
盛のうち花うつくしく和で義和の憂勤も手身のいろ
老込と車上とる時八猶更を見うまもらまる花美な中
生仏合一くるへ指く男ひ多ぐらも年壮く看世ねば
笑くれも嫁とする世縁の色の別世界真の通人とつ
ものハ則年博女を相手にうてもナニまぐ左様人まるやア
ものの実よ戦業が正直なるべ収糸へ業をるのぐらふ

叶れ身が恍惚て居る眼うち壮年とつぢやアねんまぐて生
分のまるうハまが生涯の指る行状ぶものヲ伝振して
業位さものと結が おるるものこ」ぐく賞るを嫌しひと
男ハね 娼妓 男女ハあるまぐ まんざら艶治とおもしまが
らもまぐ身をうぐる助とうれバ清ぐるく言葉と同じく
国で腰之乳汁のしくけもあるまぐ おるて業年の再
延と賞るるく美男まるくも狼 男女ハつのよまぐど法の
女中の不具をうぐく 私祇とうぐく 内密を清るる癖あぐ

廣き世界一統の好男子と賞べけれど夫より欲頭
なしとする人なく今までも不言とも世間一統の丹次郎
達者よ其の如才あるまじき娘にすがるも深く思
案じて後よ実ある情人を撰みなすべき行要ある
べし

ど「褄の様子な気の様さそな
それじやアしらぬ情人がある

きく「ヲヤ米八さんお帰り久しく松やア まア淋しくなくお崇め

きく 淋しくてならなくなるさハ 米「なんぞヨ此嬢ハ側のまゝネ
延寿すら其のウ元女が此様お花じやアありますまい
八重喜さんも黒喜さんも其の外も唯今ぐら唄てお出ざ
ものヲ 米「ヲヤく左様そうして直に寄るなら元女さん
大分の精が出ますネ 金「ハイく真平の兄はなし
里「ヲヤ米の字はお早うくる子 先刻から房女が御待兼の虫や
米「赤鰹でもあるまいし 金「ヲホゝゝゝ 真蛇じやアあれ
あろうく 米「アレサ其様な気障な洒落をいつて梅暦の

時ふようの中裏が面白くなひと言まるハみヤ文ようう
私きやア大くの言伝をつまれさョ きゝヲヤ 姉よさん注
ゐ人 采ハナニサ 則ち兼ゑどョト 寛永笑ひ 采ハアノみ房童ぷん
明日ハ主ぢるふ出勤しまョ。ョ 兼ゑい き ハアイト 寛ふ ○
あるゞ

第二回

退まゑゞ適まも ゆゞき鼻ひとをゝ所あり顔ふ世成
るゞうみと源造の人ハ婚うけん史ハ百年の余を経て

枯木のごとくなりぬる人ら病人なら老も角も人無くふ
活業をせらるく者ゞ親族の便ともなり彼是の家職の
勤も妻子の不便捨て去る鼻ハ易くも史をようと
する人の苟或私義ハ如何なるうん然ハ人孤別の第を
除ゞ第ら まも せゞ第ら まね 梁婆の 寄常を なのとう
まると理屈を言ふて 悟ゞの人もあるゞきなれど世の中ハ
遠ふとのふが実意ふて婚う顔ふ多ものを 消ゞハ 婚う
可ゞ ものふあるゞ 兵遠ふて 悪心の第一ハ 強欲 表欲の 愚人

の〻。色情に言ある女の外は少し遂に〻く着〻ようし古き
病風ある性暴人を和らうふして他色を自然と生ずる
ものぞう〻実に業次第は紀綱お房の両女ともやどよく
同じ里に生まれ彼米八が生まれしより姉妹中に満ちく
性来に両女を尋ねぐさめ多辞よあるを双方親の不和の
関ある義理合ず郡〻く場所を添くまる哀の遂ひの楽しき
ふて遂ひ嶋の別荘に遍ひ浅八本家に住居を所より
ふ〻ど婦美川へ訪を新久知ようけて仏に望ねく日を

遂ひしぶ叶程父の兄ありける懐右衛門とのよもの本国
実母清程ある青葉ふの所に住居て先祖より連
綿と相続せしぶ先達てより大病うて業次郎の父を
呼に人を参せるぶ父
も病気ありれば早く帰
孫に懐右衛門方より久しく男の業次郎に財産を
わどもうう〻くもあり又存じ寄の変もあれば見聞
同居してゐる父の名代を兼く一人ひるいそう〻呼る
様よ猶〻今年十月十六日八大すの先祖の二百年忌に

あくれば大法莚を勤め終て帰宅に古郷より花を咲
きたる梅ありとて茅次郎成下り呉たる梅の枝入るるの花
術到来なせしに茅次郎は遠慮なれども父の
名代先祖の祭祀伯父の病気見舞為ともいふまでに
婦美川の方も仏のうまでど見舞うく両女に手当の金を
あたえ二度三度の飛御ようせうとて飛御と
もに鎌倉を発足し歩行も堪ぬき陸奥の青森といふ
所に美伯父の家ありいろう病気の容体を尋ねば思ひのみに
疲れ気うしといふ由なれば安堵して帰路を述鎌倉の
逗留古屋を親類の家毎に配らせけれども物貰ひ田舎
の人くまれば茅次郎は知ぬふりその返礼をなるべくと
彼方に招うれ此方より同寄る是休足を四人は毎日後は
毎日く親類の人達に疲労をるで勤のでく十五六日を
ふるーたる乃中の日数をうるべく入ては四十日の保古郷を旅立
うべ鎌倉の方のくなつうく別て辰巳の両女のなど恋しく
思ひ早く帰ふと越うんとされど来月の十五日を勤

先祖をまつりて因出雲鎌倉へ帰らんと
不自由をこゝ方ハ着せて般若花の古地ハ生まれ
ゝ私をもの義悲なれバ今暫時この
田舎に住く出家の者の活業の体又ハ海川ハ渡世する
者ども艱難辛苦をも見物して異くも産して喰ふ鎌倉
町家の安楽を羨きうらやと繁昌し家業を大切に親達へ
うらやまし苦労をうけべうらやと最く恥ぶき伯父の異人関
捨ては浮うも自らも孤立ハ男人ども道中案内を

うらやまし百六十八里十二丁空易駕よりあとざれバ心細も
悲しく明渡しふして仮住居と定めらるる別国の
物うくよく寂びて人情本の大古板を捨方ハ徳
久遠に居しても居らうける峯アリ林しらて法られ
泉成程人間の一生とつゝのハ何時ハ程を更住て
日を送るるあるあるの知遠人ハ
とつて今日日出泉ハ百七十里も奥の仕程を所へ来て後
金子一月でも屋敷とハ美ふも見程とハ男ハうんざらし

青森の里ゑ
半次郎婦多
川の使りを
夢ゑ視

お房が婦美川の唄女ふるうて櫻元の紅梅さんとも
いふまでもなきものが意が靄の仲の丁の藝者よりうとおもへば自
身番横町よ住居をして櫻川由兵衛が新陽の洋ふ寄て
さてもーでも住うり下ま屋の和十郎が俳諧を進めて暮ばそん
ぞとのふ身の上ともうろうろ何でも人の一代ハ宝つくるべ
んざい今頃ハ時世ものをして居るうと独言を並べ
ながら又心の中ふるう日を考へていつぐ猶あどけうろうー両
女の身の上彼別荘の座敷ものて芸居だもーの怪後が斗ふば

結ぶお房の縁おもへバ不思議な変であると唯うろう
きの猶ふ塞う涙を催し居る折しも陳ふのふふ人
音して縁側よ手を支しー振ふ下女ハ若旦那さうの藻
衣の婦美川とやうろうろ寄用ぶこ中てお手紙ぶ来ふ
まーこ　峯八エイ　ナニ婦美川ろう代行記きまをく手紙ぶ来る
ろ人半体でハ自ドしくト　起上るバ下女ハ障子を押
明て手紙をさ出し勝手の方へ立て行跡ふハ猶も
やもうぶと手紙の封を切るさ人いそぐハーげは押ふき

まぶ
半よう　漢　手文言

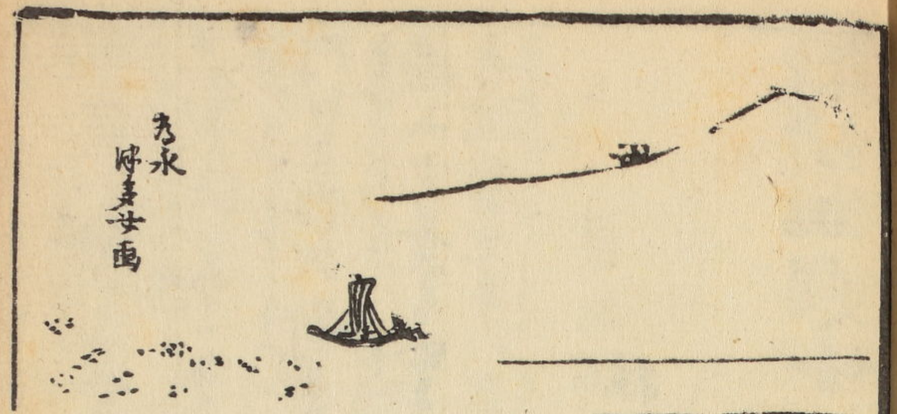
あるや先医師おかれて後
気ぶん　物まで日々漸く癒おこるく
いろく医者を頼て薬をすすめ
一向さらなく新に着病仕り
いよ〳〵神きゝやはり仏自〳〵御けい
すぐ〳〵とうとうしでも

なるく　快気　物あハ乃人中さるとも頼て
お医者さゝぬも宮年お勧つゞ
宮〳〵ゆく　漢ぐすり　あゞの法て者
文ゆ系おありぐうめと　さきとうあるのと
かくどいろ〳〵ど息の沖見非
宮年さゝに年　ゝに年度とあハまてある
ゝ仏ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

縁起目出度しまゝ命ますゝくとぞんじ
ながら孝心もいかにもよく心うしろがみ思
毎みよくやよふらふぞやおもしろやく
ち帰り孫しせめて一言の御名残
ねちさばされは孫くらし頼みます
心せうらくなるまでもめづらく昔とくで

峯「そり此孫をあづかりて此三四日とゝさんおつかさん恋しく伯
だら孫の心持であれともうく後は横におよびがたく迷ひとゝも伯
父の恋しくいふは理ではあれど彼是眼をよせて気の毒
逢はれぬなら近所を見物の風俗で住宅を出てそこから
直に鎌倉へ帰らふト手に取るものも取あへず伯父は元
末の者も知らぬ孫を支度を調へ其辺の景色を
見物し何か青森を先出て待うる路の案内仙台の
荒浜といふ湊から船の便宜ありければ七十里の東海上を

一同一緒よりさくせ平塚をへ所ふるて直
ちに風の強きと共に雨も半降ふ飲子
の陰よりはしらと猶近づく果ては雨ふ来
花ちる如くに里一時とめまうつく名ち塚を
川の和奇町ふ入り負多番横町の家の
前より近づく桜川内侍帝嘆女の
来八〇〇〇〇〇〇〇峯さん久様早く戸田沢うを
さろまヨリ彦吉さんが気をもち切て



お在ぶ仏様もお豪さんの病気が快気
なるあのでお茶さんもまだ苦労ふ入るる
まさらふまヨ〇〇〇モシマア早く見くお上様蔵
まートいはるそいくぐ峯さん八男八郎ふ
横様もうくうくまでうろうろつく断ふ立
寄る折も節向彦の声の楽しげふ〇〇〇サ
姉上さんり姉上さんやあ気をもう〇〇ふ
持て参ヨお豪さんり今ふ豪さんが

帰りて おなごらふうつゝ吏は気をさげまして居ておくれ
ヨウト 泣なのくよる 房吉の 声を聞よう 掛せるう 程気の毒く
門口を忍び 倒まて 峯次郎 よりうぐまちくよる 成うけるぐう
涙ふ 一言葉も なごりける

狂訓亭門人

補助 爲永春鶯

校合 下谷 爲永春笑

春色梅美婦禰巻之一了

春色梅美婦禰巻之三

梅園英對の拾遺

江戸

爲永春水著

第三回

再説峯次郎八屋敷の家内の騒ぎを見まハせば不便
なるうるの事ハ所詮治修のあるまじきなれ
無なるく 涙の眼元 峯さんの人 家さに早く来て
お呉なるバ 秘ふ之ニ早く 伯母さんく
アレサ お茶さん お茶の煮しぐって お主の峯さんが お出ぐう

気を丈夫に保くお呉ヨウ姉上さんト涙をうかべて嘆きさん
とあせるも血縁の誠みて表まいハん方もなく峯次郎も
抱起して　峯ヘヲイお桑さんコレサ気をつゝふ保なわ三サ
峯次郎ゴヨ田舎ゝゝ丈夫と信切よやんごとも病気なつて
呉るへけまゝ服ゝゴヨコレサくトうろ〳〵して理屈もあるゝね
詞を出ともも実ふ親身の歎きゝ長く病も丹公とわゝれ
たりお房ハ姉を峯次郎ふ抱せく垂て傍ちに火出茶瓶
ふ湯を沸ゝ　きヘアノ峯さんお桑のまうゝ出を聞ま

せてお呉ゝ成ヨアレサはゝう直ふ吹込ゝくつそハ飲ハ仕ません
ゝゝト言ふまゝ出て峯次郎がお桑の口へ吹込つく　峯ヘヲヤ
くゝと嘆へ運ゝさ抱ゝと思ゝ病ゝ気が付ゝ抱へ
て居ゝ病を抱下して寝ゝ　峯ヘお桑さんくヘヲイコレサ
お桑。峯次郎ゴヨトゝ耳に通ゝ去ゝ病ゝく
魂ゝもとへけん眠ゝ服をポツチリとひゝき峯次郎の
頬を優ゝと着て　桑ヘ峯さんゝ人トハ一言のゝも苦痛
の身ゝ消ゝ手身とゝ言ゝ笑ゝの変ゝ思ゝ

てゝ涙をさらさらくと落し　紫苑　まぶり　条へどうぞ命のある中に愛敬とおもふに会が屋いく

姉しゝ　ひるゝ　上下身を振ハし　条へ　折角此拵へ　こんなもまこと

直ぐに別まるのハ中しゝ　ヨトハ　前さぐらくの中に　お蔓　言量の

憂きうを　彩て　涙のいとまごひ　減き　縁　ちう　情うひ　果て

お蔓が　身の果とハ便　泳　湾を　梅　流き　迷も　命ハの　彩

まつぐと　家しゝ　ちうぐらも　気をうげまし　峯へ　ナニく　言　拵

悪しゝ　ハ　細ひうを　言うき　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう

うちうハ　仏　拵うを　しゝ　ちう　涙を　一旦　世ぞ　ハ　変　りのうる

彩業でも　成ハ　金　度　ちう　家ぐ　歳　ト　力を　貸ても　重　病

ハ　労　て　終の　涙　れハ　きぞ　ハ　ちう　ハ　命ぞと　帰　ち

ても　悲しく　思ひ　涙ハ　ぞ　条へ　イヤく　仏　拵して

老ても　存命ハ　ハ　ませんヨ　仏　率　逃ハ　ち　拵　仕　度　ものぐ

と　思つても　お　家　まん　ハ　別　まるのが　ト　言も　涙ハ　家　ちうつ

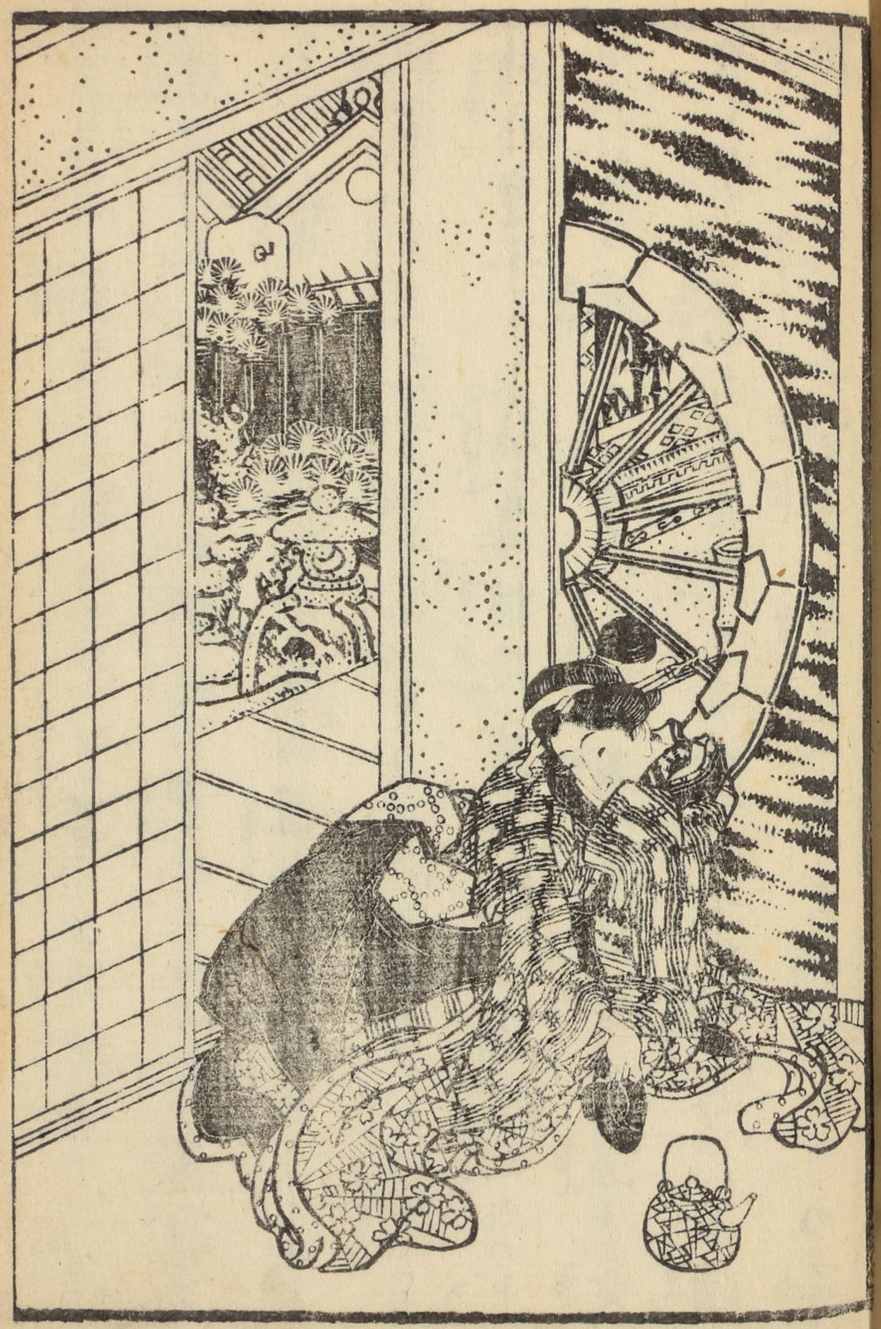
条へ　合　掌　て　覚　悟の　躰　条へ　お　房を　何　率　長　ぐうて　ト

いつも　出　て　眼を　用て　息も　再　度　絶　入る　風　情　お　房も　倶

きろう付き「柿上さんヤアリ」ト流せば峯次郎も
狂乱のごとく峯「アイコレサお豪ヤアリ」〳〵ト変じ
上ゝく嘆ぶ側ゝ峯次郎の脇中せさきとりて「峯さんアサ
峯次郎さん貞を お覚し 安藤ヨモシ〳〵 美を看ておいで
成のうへトかと起きて峯次郎貞を覚し 今ごろ四
隅を見まわば姉負川ゝゝ陰奥の青森の里の伯父の家
例も仮屋の別るゝて特宗しゝる枕の元ゝ豪を枕もとりて
ば覚まし伯父の娘のおゝて今朱ハゝゝゝ十七歳行

鄙に稀なる容色みて刻坐ひもさきぶみハ富有の身月
駅しゝゝゝぶと藝能の業ハ鎌倉の伝手ゝ便りて昨下し
全師匠ゝゝゝ自然なる都の風俗ゝゝゝ
ゝゝど覚へてハ両親のみハ何幸して繁花の土地へ住居
たく思ひ暮してゝのりけるがお京ハ此峯次郎の鎌倉
風の艶男ものやゝゝゝ正然しゝ姿ゝ和をゝゝくゝゝ
兎や角思へど初恋のゝゝ和ゝしゝ言ひ言の葉草
もゝゝく ゝ 伝と若るの 若清ゝ男の公も 汲ゝ稀ゝく 峰

お京
峯次郎の
徒然を
訪ふ



くよ〳〵と物をのゝ痛めて日〳〵をくらせしが為に親達の内ひ
ゝ峯次郎成ゆ下〳〵仰率別荘を事れしう人ゆて家督を
ゆゝ〳〵賀とするゝ左もなきうゝべ鎌倉へお家をかゝつて
別家を立支を峯次郎ゝ由ゝとゝうゝべお家のゝゝゝ頼朝〳〵
所為なるべゝと義言の相談さんもあゝうゝべ浪ゝのいそ
ゝゝ意の拙ゝの迫りつゝ新久男ゆと集せしゝ思案を定
ゆゝ賀ゝ茶も喜き便ゝゝ朝へゝして駿人ゆりける清
風とゝふ名高き銘茶を贈花ゝゝゝ峯次郎の居

間へ持来りて今登寂して橋言せし成起しゝうゝゝ
京一ホ〳〵〳〵峯さん由月が覚まし〳〵ゝ人お茶さんとやゝゝ
お茶さんの情女でおぎるまゝのヲホ〳〵〳〵ト言ゝて粥〳〵
起ゝゝ峯ゝ引寂苦しゝうゝゝヲ大変ゝ盗汗がおゝト
ゝ杖を手て行を杖の杖然ゝゝて居る京一マア御茶でも
お上ン成ヨ行ゝゝ茶を四覚ゝまゝ〳〵ゝ頼ゝゝて
お要ハどゝのゝゝヨお脊中成さゝゝゝゝト峯次郎の
脊後へまゝゝ肩へ手成ゝけ鼻成ゝゝ寂ゝく脊を

捨ふるる　米へナニく　お京さん　憚ぶる　お止ヨそして　伯父さんが　お祈よ　肩　もませなんぞ　さると　腹を　おこ　成ハナ　京へイエ　父　ぜんが　毎度　然　言ます　ハ　番　ハ　盤　花　祈ふ　育つる　者ぶ　おーの　間でも　さぞ　意　ぶと　倦て　居るで　おらハ　祈　節　側へ　行く　気を　負　ぶる　揚よ　さるぶ　紙と　言て　お　左ぶる　今日も　お、兼　ぜんふ　然　いて　ぶ　家を　おしらて　来る　ましヨ。アレサマア　生　お　肩を　さそう　せく　お　異　成ヨ　ぶ　揚ら　陳らまる　のも　居ら　ね　憚く　しへト

言ぶる　笑を　含て　資　後ろ　横　鬼を　さー　視く　赤の　顔の　美　羅さ　田舎　育と　知ら　れー　意　ふ　最ぶ　毛　殺す　涙き　男ひを　うちつけふ　言ぬハ　いふ　揚ぶ　合せぶ　みふ　あるねども　二個　並べー　顔と　鬼　似合ぶる　妹　芳　互ふ　おすへど　峯次　郎ハ　今も　古郷の　美ふ　見ー　両女の　すを　男ひ　まれバ　衣通姫も　楊貴妃も　久　つまる　毛の　あるぶれど　雑ふ　身の　情ふ　ことげ　ふく　振捨　らまも　せぶ　殺　ようふく　巣へバ　そそ　峯も　行ぶる　娘　乳　ゆてそれ

ぞと悟〳〵と品〳〵しく初るなるのむづけ業〳〵定めし
鎌倉の両女がうくハ仕方ようく言も寄るべきお京の
密〳〵と通ぶん情き狼うまども淺〳〵のよう伯父のおも
つく〳〵義理ある女ふ疎つけて来も遠〳〵左れねば春の
面を押ちづめ種〳〵物をいとめしが御〳〵と思案して 峯
お京さんお前ぶ私をアア憤ひ人思ハまひ拝ぶら角
恨らしいるを言ぶ腹を立ハみるまひうと言ととお京ハ
怪しそふよ 京 何をお言でも私ハ腹を立ハいさし

ませんヨ丈ぶ〳〵早くいうて関せくお呉を成ましナ
峯 ナニサ外の変てもうひがアノウお京ハ私と同伴ふ
鎌倉へ行く気ハ自ハ久 京 ヱヽ私ハ道分まり度
けまぶも 峯 伯父さんが来うまひぶらふしお京も私の
様な男と同伴ふ路を行のハ参ぶらふま 京 イヱく
私ハお京さんと同行ふうぶ仏所へでも参りまをヨ
アノウ仕るも御ぶん戯言ふ私へ然言ましく今
度峯次郎ぶ帰国第一鎌倉へ同行ふ行まひう往る

らば當時中支度をして来月末帝が被地へ渡る
事 同伴ふ点して先らの峯と支婦よりあると宮ふ紙
仮令のごとらんと言ふ〜ちょと思へ切りて言ふせーがさとぶみ
焼物のそぐうーく顔て紅葉の夕映やうづく赤くの
稍さん異なる国の人公もうらんれ意の路芝ハ踏ごろよれ
楽しくまれど峯炎帝ハ泳つ〜〜 峯アハ〜〜ナニ偽文
きんが金稼ぐると言ふものうそうやう 空ごまう〜
お前と私と情合も何もあるまで笑〜して遠えて住て

鎌倉で結髪を十分うつくしくして姿形容を又きよらかに美麗しくあて。モウ〳〵鎌倉第一番といふ好男子を家の丈夫ふ着立て上ようぶ伯父さんも安堵するぞらふ〳〵お前も田舎の人を丈夫ふまるようふ宜らふと思ふ〳〵サト〳〵バあ〳〵根ゆ〳〵げよ峯次郎の顔をながめく涙ぐ〳〵京〳〵イく工私〳〵やア母のお人〳〵と夫婦ふなるとのうらぶ行故ふ鎌倉まぐ行またりのゆ〳〵顔を見へふけう

第四回

笠を取り旅宿の軒もぐるまで結び別ぐる峯拾ゆトぶ旅〳〵ハ寒雪霜降後遅ぬしの秀遠ゆう〳〵宮ふ着ふ林ふ入ゆ〳〵逗留せ〳〵峯次郎ハ伯父の病気も今度〳〵孫ふ対ふ弟の身の上までも案ぐゆ峯次郎ふ〳〵のすれ〳〵いふ表ふ意ふ清ふ京中を鎌倉人ハ人ハ善ふ義侠を宝やしぶ田舎育とのゆども都ふ和ね根を遠ゆ為中かまぐ宮ふ易き吉ふ〳〵ぐ〳〵て利ゆ仕の男をゆ人撰み峯次郎と弟とあ京中ハ通〳〵ゆ

どうぜん　きゝつぎ　もそ〳〵
籠同然よ　高次の人　を産ひ　実ふ大丈夫ふ　紅潮き　族の
宝　さうけき路も　苦ふ　ふ　で　一人が　故今を　をざうまゞ　一人が
有ら人　近くるよう　めし　覚の山を　城里　紅る　行く　日を　重ね
程なく　浅倉人　つき　〳〵　うゞ　峯次　帝人　まゞ　蒙うを　捨ておきて
辰巳へ　まつぎ　ゆき　蒙音　房　蒙ふ　逢んとて　小船を　さうらに
流の上　祈ふ　仕るの　扶合ふ　峯次　帝の　船へ　漕近ぶく
一艘の　家　拡　私　まぐれを　よくく　峯　〳〵　峯さん　待て　おるる
さんへョ　蒙さんり　〳〵　峯　〳〵　房　蒙ふ　宮ふ　で　逢さ

のウ　弟　女中も　浮も　居るひノ　只一人ウ　き　〳〵　ア、　和十　ほく
蒙さんが　喜　〳〵　ふて　〳〵　ふるひ　祈ぐ　今日　和十さんが
お蒙さんの　お澤ん　歳さるを　和ウ　せ　〳〵　只　まゝ　さうふ
種　〳〵　と　都合　て　一人で　女出　て　蒙さんは　逢ひ　ふ
ま　〳〵　ふゞ　例の　祈で　地へ　おぞ　ごと　のふふ　ふひで　逃　で
まま　〳〵　さん　峯　〳〵　紋和十さんが　仕　身が　昨日　浮　狂ふ
帰るのを　知り　ふ　ける　ノウ　イ　立　和十さん　斗　ぢや
ゆ　〳〵　ま　音ん　蒙　音ぽん　ま　ふ　籠川の　中さんが　和　せ　ま　〳〵　多

峯「ヲヤそふ言ナがらお気の毒も知つて居るのかへ　雪「アイそれどころか
親方のお爺さんより先へ御亭主殿にお目にかゝつて狼狽て聞く
きましたヨト言つゝ峯次郎の顔を倩く看て涙をうかべ子せ
ア此様に久しく遠い国へ行て帰らずにおいでなさるなら子ヱ
憎らしいは親方さアが亡んでも住家を思ひましたら　峯「それ
つまらぬ事をいつてもおまへ前田の家も潰して閑せ狼狽る夫婦が
違ふ方で根で居るに違ひないが二三十日留守も嬉しい
衆人へ行て居るのかと思つたらうし　雪「男の涙に涙で耳

居るかへナア久しぶりでござりますね又一杯のみやうトほどうう
峯次郎へ亭主の舟に乗りて一艘の舟で帰して一艘の
舟にて手船で夜のうちに来て流れ中なれば絶て久しき再会に
積る噺と言ふものゝ其まゝ口でも斯く話して男の女
「ホンニ若旦那さまお顔を見ませんかヨウお如何なさいましたも無事
まづ今ねむればにて早く此家を成丈昨夜お作が来て
倒して帰りましたお志さんへしサ　御文を下さるを成
ましたと言つて見たてる峯次郎傍に来て見るといふりうれ

おもかげと同じ姿なれば御覧じ見て峯次郎と
同時に起上り顔赤らめて恥かしそうなる身のそ
ぶり　京　いかゞしてアノ私へ此方へ　峯　エ　私ハ
だと　京　エ　お房さんとこの室　峯　エ　イヤ
名を改め姿を見てさとられたのチ　京　ヲヤ　私ハ　お兼さんの　峯　エ　ナニ
京　ヲヤ　お兼さんが　峯　ナニ　姿を見ますとハトロ〳〵ほれ惚れ
あてあぶ〳〵　涙ハ　ホロ〳〵　顔を上げ　居ら〳〵　ウ　所へ　名
ハ　変へ　ア　居るの　家と　呼ぶ　旅店の　奥ハ　届ら〳〵　姿ハ　して

未練　金へハ　ハ　ア　せざる　ウ　ウ　ケ　ま　ば　峯次郎　も　お京　も　猶
猶　一　ウ　ら　け　所　ら　別　て　路　を　ま　ぎ　鎌倉へ　帰　ら　ま　ケ　る

○

「夜見世の珍もまぶ実の青ふ月うふ素の
移り変に移り〳〵おのこと姿ふ雅の趣乃
変ぎぬさ中略
峯ハ　ハテナ　あの浮留ハ　仏ふぶらう　孫ら一ふ　紙あのゴノウ
お兼さん　トの人ども　お兼ハ　傍句て　居るの〳〵ウ〳〵ぶ　眼み

涙をうるる 忙然とせ〜 猫子ゆえ 峯へヨヤ お糸さんまこの
とう男人なしして 泣のハア 青森の 爺ぢさんが お糸と
當地へ 登りて 来て 後ろ 来て 泣ろう 来て お糸の 居の 絹糸でまご
泣 泣ぐ ものう 案じて お泣 のう そのうち お家 ので
ヨ 来月 ハ 古々を 時間 て 仕方へ お宅 ア そして
お糸 も 夫男を 丈夫 もごして 伯父さんも 生涯 に
地ふ 隠居 さうとの して およこ〜 ぐらう おーの 知
みうのが 孝 防して 泣て お仕合 トのハ 来て お糸ハ 養次

帝の 島 役 情 ちまぐら 涙を 被ふ ぬぐ て 京へ 行 工
ナ ア 田舎の 爺 さんハ 来月 墨 地へ 出て 来 ると
義 ま こうう そ 来ハ 仕 ぬ ぬんぐ ぬ ぐ ー ま ん ヨ 峯へ
ぐ ハ 他ふ 行ぐ 泣 ど 出 ー ひ る ぐ め る の う 京へ イ 工 お 糸
さんと 仕別 義人 お 出 ま ち て ち う 教 も で だ 行 う
来 生 ま さ わ ま ハ ま の う 本宅 の 伯父さんが 私を あの 別れ
義人 お よ ー の 帝。 逆 泣 の 別 ハ 高 鼻 の 養 が 保
養 陽 ぐ ち 彼 世人 ハ ち ぐ ぐ 行 で も 養 次 帝を 乳 工 対て

大ぶにしてくまろと作まくらに和八もうく旅
くつてなぜでも心のぞくくけおあるさんの山男を落至
上様と思ひこんで居まるのを此ごもおあるさんハ男を
言つけても出来ぬ成只居ごつてどろうおまを成
まるくろう和八女ぐ出しうぐどろうまるョ行程で幸ひ
田舎者でもぐ付ませんくらおあるさんのおもを入ら
ひまぐでどざるまるぐ行章此るもも歩働も
まて筆くすを教初て手紙言分てお呉成まーナト

在所ハ居さる之第ハ男ハ深くる陸奥摂の細布絹合
男の心ハあらぐしてもの形くうハ意表の模様を乗せ
思ぶ格う吉々の親も心の底ハ面ま鎌倉二個
連ごろ族の宴酒くの成家で幾度くく言ぶれど
猛ね風俗さる業次第ぶ程面くしくて今ハまくと伯
父の分も吉々の父の心ハ合疲り陸奥落ごくハ他見ハす
揚屋さろく明日今日こまろど までハ男人のをさとしハ
汲ぶ人まとるもの心ぐろくとて物うるも産の多ぐの

貧乏でくらしかねて繁の結びづけがあるとハせるひが
ゝ泉ようゝ博りゝ人ぶ意をあて涙くちぎりのひる
やうんと兼ゝ展已ハ二女まで産れぬ縁のありぞとハ
知らねお家が嘉義の情あるまと兼知ゝるづらも相と
お房があるうへハまと繁りるべとまもうみぐる
後手同士の安坊ありぐうと思案に暮る案
顔お弟も猫息仕ぐりり博と生根を思へなど言ぬハ
こまぐぞ生辰のりゝ博まるも思ハ涙の思を洗ふと

ゆ物思の方へ立て行く折しも流れる雲の間花の香
ハ父の男とつふら知らねど侍来の人ゝ行ゆゆ変
ゝて中うも年齢四十の上を二ツ三ツも越らんと思へ
尼一人雲水坊ゝ屋の頃ふうびゝ木戸の出家格の
下へ立佇ゝん晴るを待間待兵ありけるゝ雨ハ若き
つふハ小止まるゝ最つぶゝげる風情なれバ宿次
帝ハ着ふふ志のびぎ板側ようゝ頃を見越ぐら去を
うけて宿入まる拳ゝ侍人ゝ存知ませんが晴間も

あま雨舎にて
長谷川峯次郎の
彩り摺を
観る

知まるひ空のけしきぞおぼゆまし手所ハ都の西ぶ
落ていけませぬ片方へ遠入りてお体ハ形成ずして
らまして髪ハ乱よ怪ぶ尼の形容伝ふ乱ふ乱ふ
情のこゝろ顔の色も白やうふ艶ハ艶ハ
羅の香ハ今も残りて職しげうぶ宮殿ありぬべき
人ありけまば雀院帝ハ座ぶ給ふきて問ふ本尊を
ひらき峯ハサテ仏法ふ尊ぶ方へお知ふさるぶ宜ぶ
まいトやさしき詞ふ尼ハよろぶ座ふ入り模様ふ優を

うけて灯寮に舎利釈迦ぶ尼ハこゝ法華ふ村の
近所の者ぶぶる三国の福ふ行さるく系統
のこゝ千の浮ふ男ふ両ふ両具ふ雑ふ武の
所を時節ふ頃ふ便宜ふて移ふ付ふ住ふ
方を不顧体を佐野のこゝの雲の
月を食ふと福ふの遠ふ遠ふ
時の雨の風雪ふ流ふ寄ふ帯ふ
しふる言葉ハ正徳の言葉ハ似ふれども昔ふを

引とゝゝ主殿 蒙ゝとる 接待ハ 何頭 新尼を新尼とする
茶屋のおもひき 茶下の 禅尼とゝも 勝うゝね 尼の
風情ハ 茶屋 茶屋ハ ゆゝゝくおもひ 頭茶屋 茶屋ごさゝゝ
煙ゝゝ ゝゝ 茶屋 釜の 湯を 汲 義の 番茶を
いれて 尼ハ あゝゝく 峯 お湯を ゝゝせう 那 何ゝ お茶を
あゝゝくゝる けゝでゝ ゝ そのゝゝゝを 一口 ゝ 兵蔵 そゝて
ゝ茶屋ハ 煙ゝ ゝ 寄て 所の 煙るまで 寛と
あゝゝ ゝ 兵蔵 ゝゝ 那ハ 常世の 何も ゝ茶ハ 故人

中村大蔵 ゝ 動 ゝ 禅尼ゝう 勝ゝる
風俗で 茶屋 定 常体の 尼法 所で ハ ゝ
ゝ ゝ 親ゝ ゝ 中 尼ハ 茶屋の
顔を 情ゝ 極 尼 モシ 貴君ハ 當 目上ゝ
ゝゝる ゝ ハ お父上 ゝ でゝ
常 関上 市兵衛 ゝ 用 ゝ 行 茶屋
尼 ゝ 頼 ゝ 一人 お 伯父 ゝ ハ
早く 用 と 兵蔵 ゝ て 行 茶屋 ゝ ハ

あと二歳半世と言ふ あごろ〳〵巻次第 拳ハテまそれハ
ぶりも多くあらうすこ力論 親父ハ病もぐず 持ち過の
新ののごとく いつも手紙をふ苦労にたる程の 尼イモ〳〵
みまとハ 山田郡でどぎわ半ば今日ハ屋の内ハ多くぐわ
半ばもの新しく入り半ばと命の危ハ古文ぐどぎわまば
手紙時ハ早く 當時までの医者を止て素の方のお医師の
薬をあとげ 義まり 結もうまくらうひと山金度ハぐわ
まだ又 伯父山さんの方ハ族の路での山紙をぐわ

まして手上 日数十日の中ふ盗賊の山火紙ぐあつて
お金たくさん大変 文をあ紙の 義ハ三十里行の
行程を明後日あくらう 巻ぐ支度を 義 くく
おぬひ 助ひ半代 手代を 義と
當村 巻ぐ 稼ぐと 山巻ふ 山三人のお勇の
山雲ぐ 巻ふぐ 傳ぐ 熟稜 様よ 山人
紙巻ふ 巻ふ 義 義 義 巻ふ
尼の書業 親ハ しけど 親父と 伯父の 族も

さし当る変申しあまりば宝言には気のしもあんまり大
るの教へ善次郎は此附言葉もありしが　峯「イヤそれは
思ひがけるひるを聞ましが　お前は御様して手段を
兼て聖言ひきうけの宝に諸ひあるされく　足「ある程お教へ
も此度出産ませうが　両会の御見返しと存じて私の
存お示をもりて　お前ふ世中だろりでござりませぬ御金だら
其ふ害一ろり　中ませう　今の聖君の御心の中に意欲の為
ありあがら業や急して　お生を成るのがござりませうこれも

前世から定まつた因縁で義理ある人　彼是と婚んでお世
気成ても両方がお離別なされまた様へはありますね
其の屋まで見覚ミ　神眼通の足の一言申しも遠慮
様なれば観念を晴し善次郎　峯「ありおど身に覚の
ひる御家の数度宴く感むりましまするがお家はマア
お様への御為でござりますまミ等ねに足も様を進め
足「ホン二楽君の御心では女の身にて子細らしい言葉も
と思し召しませうが　お心の縁でも人相の為を好くまして

[illegible]年何[illegible]精を出して[illegible]業をあらの貫くて一ト通りのうつかしも遠ひのうの[illegible]物[illegible]とぞを我[illegible]女のいくざる[illegible]の折ると途中捨て仕舞[illegible]業人目が他のうたくしも[illegible]晴がありまして[illegible]ゆふ[illegible]学び相撲よ易[illegible]教へて[illegible]おまとび叶泉の上も[illegible]顔のふ知を[illegible]の[illegible]の[illegible]の合が[illegible]まして[illegible]僥倖とうて変をも[illegible]

春色梅美婦禰巻之三

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

第五回

這ようの暫時春水が老婆[illegible]そつぐる異見ごと[illegible]尼の[illegible]を假[illegible]て兒女達へ教訓をすると[illegible]例の人情本の模[illegible]本の[illegible]再説彼尼ハ[illegible]次第ふ[illegible]の[illegible]の[illegible]が一樹の蔭の宿さ

他生の縁と因果はゆるして宥解する人〻も義
理の上に初き付ふ父ハ別且母と兄弟ハ養ふ世ハ
便りなく活業せし中母ハ
あく事もちよくしゃ知れも悪き不乃人酒と色とに
のめり勝負事に人常の所為ハ只一人なる妹なれ
ハ世ハ
思ひ出ふ事の後悔乃ハ此月の十二ハ
廓の遊家ハ賑ふ人ハ生涯ハ初き
より苦労せしなれ他家の娘の花の美二月山桜の

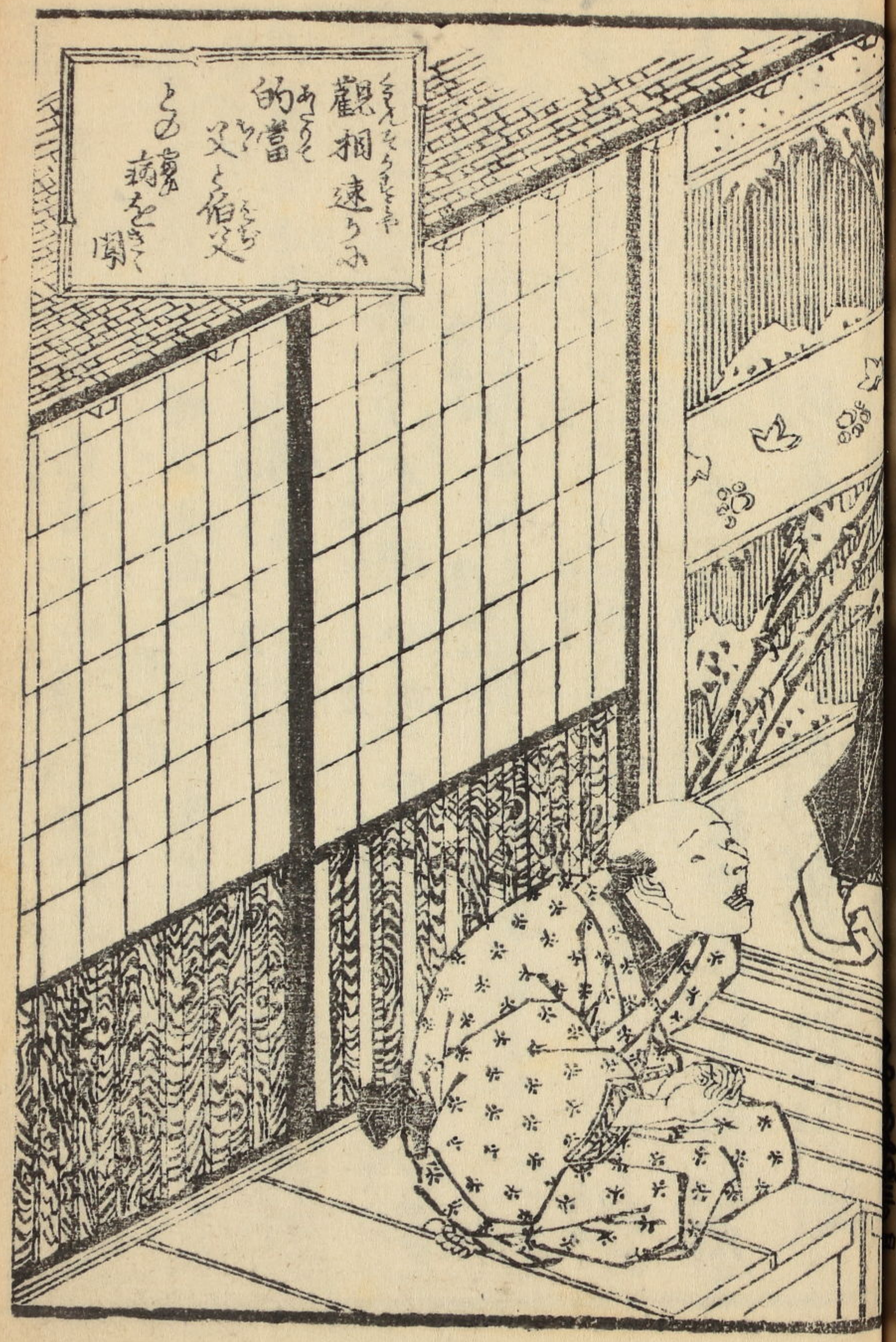
ちらしと思ふ乃も今〻川行の流れの中に沈られ
瀬もうき少しさふ涙でるに月と見ハ美のごとくハ成
長歌を賞とする勤の身友傍輩や幾月の三年苦
さ〻ら〻廓の常歌まの数と客人の逢さ加らの
中ハ人相せよう〻観ぬ方永く通ひて此の男を
家まで相愛のものを信仰ハ義へ与まとる事度ハ自
身で稼ぎ続の表情ハ身の人相を考へ言ふる幾度ら
歌自で見事〻見改ても自然ハ空まる運ハ空而ハの

備へ我身ながら悔ふかきを覩ては人ごと捨て方もなき
閑寂一生涯を浮草の憂を重ねて閑里せば孤独の
相と悔ゝしう世しき中ふも発明し天をもうらみ
情なき人を咎ふる命を惜み遂ひの雲のさまゝ消へ
他人の景へも雲ぞ昭月と暮ゝ今日と立さらとも
老角貧窮のいとづらしき繁化粧知細くも老み
けうるゝと詠まゝ古き哥をきく今ハ我身の上と詩も
最恥ゝき世界の年の明るを待て三年ゝ

変ことけどゝ改て名も清ゝ縁を頼ゝ黒髪を捨て
衣を墨深ふゝる深世の苦西を知ふ止ねハ乱も安く一応
不信の安楽き我身の一代を新ゝ人相を学ひ
身の徳知ひ節の信ふして中年相を観るを学ぬ
学ハ一生涯及ぶ頼ひ知を人ゝ叶ハきゝふ
乱を拒ゝ安楽ゝ河ハ流ゝ教ゝ身も
陰陽の理と天行の生別を学ひ家ゝ貧ゝきも
世ふ世ぬ今の悦ハゝさ半ゝも年の枯ゝ存せハ

ぢ〳〵の苦と樂とは世後とそも在さんが知を清め身を
修する事ふるとうるさきなへ〳〵しく其語を中年中れ雨ハ
晴〳〵青空の日ハまぐ西ふ没うるぐと又後日今日の
雨降ふ泰平をうんと言ひく稼を這ひうて花ばたらハ
産を出すと業産所ハ立上つて今稼所とぐ出て言
さへ〳〵ぐり けり世ふも稼する尾ぐらぐや○見よう又
例の親孝行ぶて繋る
峯ハイヤ寺物な人ぶ所舎りをして居ひがけもなひるを

冥せらまさが何程しさめのぐる何ふしても本宅の都
ぎんが今秋大病ふなること国元ハ彩しさハ居ふ見ふるひ
俗い又さんも乃中ふ墨ぐ意ぐあるといふまるしぐハ捨て
意見意ト以西へお意ハ立出 兄上さんお見
世の妻御ぐんが参りまして 峯ハテナ何ぞ用ぐ出て来と
のふ和らん此所へ何で居る 糸ハイ居今居を洗つて
屋ふまたと以西へ乃代の矢御ハ揃をいふ稼例の
方へ御参り 矢へイ 西毋公さんふ西ハ上でぐざるまた


觀相速うみ
的當
文と佑文
とも
病を聞

峯へ去年の秋の作用ぶの長一丈十二作用とやまものでも
ぐざわもせぬ位母さまの年作まくて今年程うう
大旦那さまの市持病ぶ例ようう秋ふ無ひ稼みで
年作屋まくうう今晩ハ出て見舞ぐらおかるさん
まー文とも学者もおもも賛くく明日でもようしふぐざ
わまくう学ぶおまーど年成ひどでくぐざわもせぬが今の
富に おもしせ年成まくう文ふ青森の国形さまもけ尾
中で作病もで作ろうく富ふ也遠前ぐとやて作ふ紙が

まりまーと トのまとて作ろと思ひ作ろう尾のおーく富ふ茶
今の新しせ稲繁きてのきとしーぶ峯ハ人ぶ不来でも
今月人今ッうう父爺さんの力を茶ふ行ふとおもりて居と
ふぐちに国尾ふ行ふ茶さん 滝ーうらふぶ往前
とーて おもよ文とも 滝ーくって行ふ人うう私と
国作ふ本宅へおもう 第一十五 お茶どーや お隣家の新茶
さんと拝びまくう 滝ーくハぐざわ まもん お前宅ふ
まくョ作ふ文 さんの作病もぶ作茶 早く 金後作成

きれ
紙バよふぶろうまいるこまる先刻のあ〆しの
でハ 峯〆工先刻のさきハ。ハアノお茶もアノ尼の数て
れ
異さ変をお図のう 京〆イ工乗〆〆ハ 嘆ませんが何ごう
種〆〆と卜占の 掛みこをやまま〆と中に 峯〆ゆ茶の
きれよかうのハ 偽人さんが道中でお茶ものごといふ 変の
ふうきを 変のごらハがそまハ 私が 今夜せるまバハ 都さん
のお医師さんを 病よ 合さのと取替て そまうぶ亜に
途中 まで お迎ふ 行〆〆お案じてるハヨト 外の遊ひを

多現ふ 変〆〆て 変さ〆〆き 峯 次郎が 紅毛多ら 姿多ら
やぶん きき好男 個〆 浮舟で多ハ 面白ふ 掛〆〆きする
掛〆〆て 皆〆〆〆〆ふ 不実を 乗る 鬼相 尽〆さぬ了
けん
多〆〆るれバ 地見で 看るう 芸男も 変〆〆 元祖ほ 紅
人と 他人ふ 変〆〆 見 腹や 嘆ふに 掛〆〆るハ 神〆〆 紅紀の
ものて 変易き 変〆〆ハ わらざれバ 〆〆〆〆〆〆〆〆〆〆〆
求めて 好男と 嘆〆〆〆〆るれ 又 人情〆〆ふ〆〆〆
紅渡らバ 衣裳 形 変と 多乗 〆〆〆〆〆〆〆〆〆〆〆

三文も銭の入るまゝに友達人をまつり射け 飛見者一口先
時に思ひ寄らぬの若元 當世の流行あり時代 知恵和臣
とゝ思ひくらべや 流石ふ 人情本でも讀まるゝ人まゝ天我
いつの稼ぎ 自情人まゝ 自行 世ふ通達しまゝ
文 信實の 人情まゝ 何をまゝ 第まゝ 實云ひて 夢
ゝ流 おのあまゝを 知りて 後を 云まゝ 家業を
精出し 人男 相談の 楽をして 保養を 知郷
流よ 年ぐ まぬ 者をとそ 神人 時よ あれまゝ 野男ふ

業ぐ 男 お世話ふ 亦ふ 怠まる 知の中を
再意 あら 世ば 業 次第ぶ 出て 行まる 手の 探ぶ 来
まゝ 隣家の 猿 お報 孫 娘 女 お家さん 只
今ふ お業 ぐんを あり ぐまふ 今月ふ 偏屈 屋の
老女 さんが 知まる 母 人 さんの 所へ 出ふ 来て
来 ゝ 痛屋 知まふ 何処 ぐ ぐまの まゝ まる ける 風 二
まぐ お家まふ 出まる ぐ 意まる ける アノ 年屋の
家の 伯母 さんで 以来 藤吉の 武 家ふ 老女 動

居ることいつも老女さんばかるまつ〳〵居るの老女さんサテ文ば
面白くもなき人作人のことを悪〳〵いふ嫌ばかりして居
まつたく家内に閉て居るのが苦でく〳〵まらぬまつたく人
お茶さんが嫁ゐまとしてお呉ばかり結構ひは姓出して
来まつたく人来〳〵ヨト打ちでばかるまたう出老女といふものハ
根生のまつたひよ極りて居またうへ来〳〵ヨト出ばかる
あつませんが老女ばかりまつたいものにハ乳ハ合ハ
まひのでばかるませうヨトいふ所〳〵閉ばつまつて閉ゆる

浮留礼

〳〵寄つた男金も信ようまつたく好こと閉まの身の積ハ
うふ山積の手業さん物日あばくて借ふ笑ふ
笑ふこと表お異

来げ〳〵ヨヤ〳〵笑く青ばかるそして物も浮留屋の文句に
まつ感心ばかるまつ悦りていらつしやいく来〳〵ヨヤ
笑ばかるまつたく人物も正解
笑ばかるまつたく人間金ハ生まるものハ自然でハ乖まつた
青ばかるまつたく嬉しいばかるヨ来げ〳〵ヨヤ〳〵然お言ばかる

らんせ田舎に育ちしお嬢さまでさへあの人一人もあらま
せんョ稀なんぞとさ絵空ッ児の顔よごしといふでござへますへ
ト面体もまきるのをいふ中にもや書の日も西へ没入れの
灑あらづみに聞えあの淋しくぞありにける
是よりお京が父の肆米次郎の父の肆なぞを
続けて説バ文の道理へ解りやすかるべき所なれど
些も御の人情本の看官に退屈させぬ世中へ移ま
あるべきとすを原きと此次の処へおあづけの米八婦

郷吉およびのかなしみに穏りて米次郎の父と伯ハ本る
談ハ後に著て看せまゐらせんとこそ

第六回

梅の花折らバあなきさん我袖に匂ひハ移せ家苞に
せんト素性法師の詠まれけん実に花を惜み花を愛
まる深き心ハ左こそあらめ寒梅の雪間に開くより
よふして三春の日数を楽しみ花盛に其粧を知る
支をなくる風雅の好人又ハあまりの花の香を誘引

梅乃実を乗せし舟の中　酒蔵ふ杉田の遠浦を好まも
ひとえば所新梅の草廬を宮の古風振古きも拾ねど
新しき花を尋ぬまえば百の花園も早年を立て　新梅
やしきに人言ぬぞ流行ふ逢もぞる　人と喜久浮ぶ屋の
梅　文好むてふ客人ふ酒をうむうるを男も四季の
旅ふ欠るるうき東の名所おぞ深名ふ濁田川の
甲斐文あるけしき都島　西男人と屋ど舟に乗ても
四く　侵ぬ意の癖ら乱にるぬ新ちもうやの

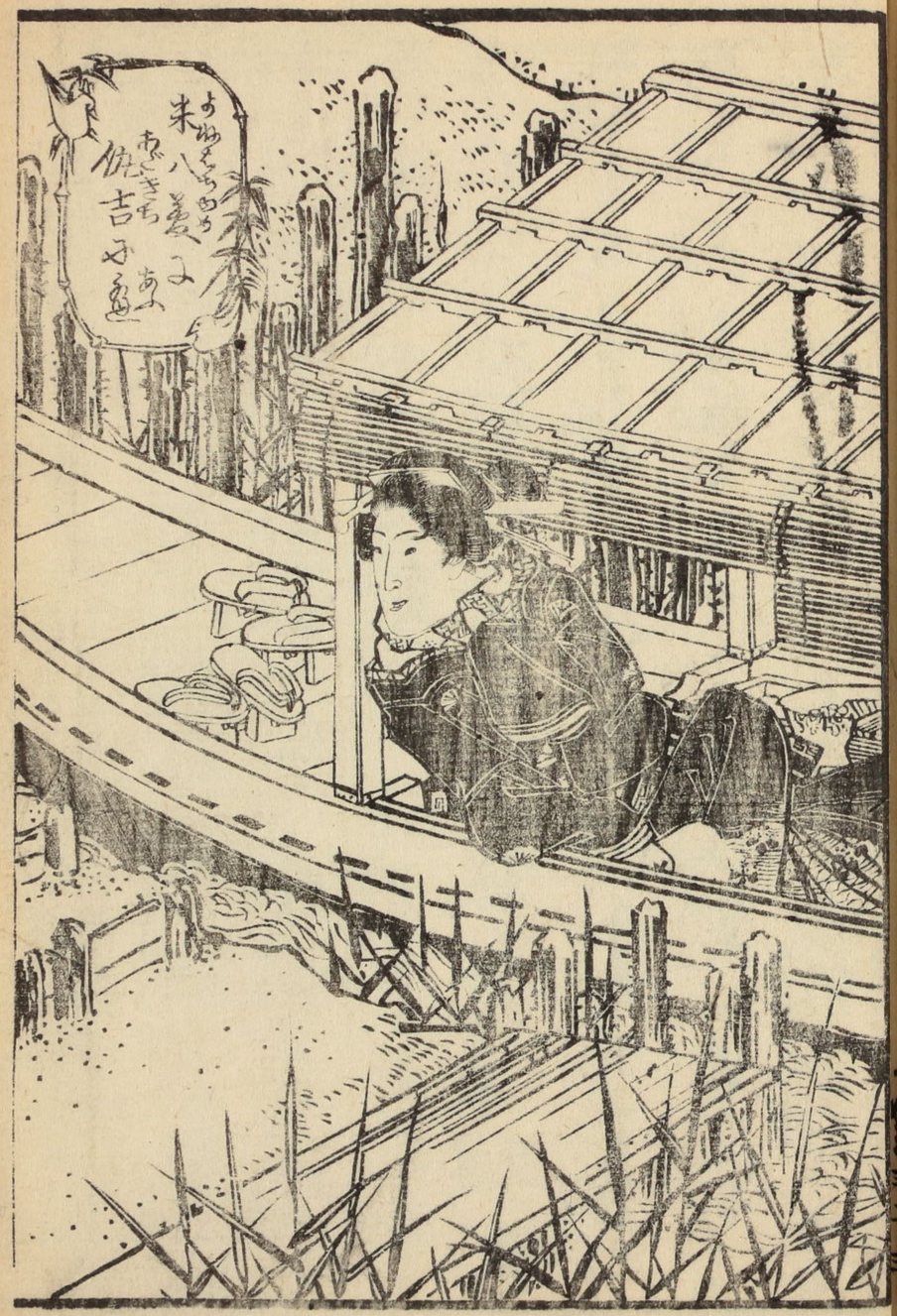
雁木ふ人種くの梅見舟　堤の上より後橋人ひる　両
個の弱女の梅の笑顔ふまぎ咲ぬ櫻の月元ぬんのう
画一つ美人に彷つう　唄ふ髪の形くまるを　細り
指ゆで押上ふう　ぎ言くふ　買さうん　ふ結ち　五根生の
悪ひ人　芸ひ　ト　美ひうぐう屋乗を下ふ人倒の
断　娜ぎ　料理　女金　うふ　大玉　戯　に路のお後を
年ひ　ぎ　ると　拾ふれ　ふ　光ふ立　茶八もう
くしきを横立にして　彼　しき眼元でちうと脊

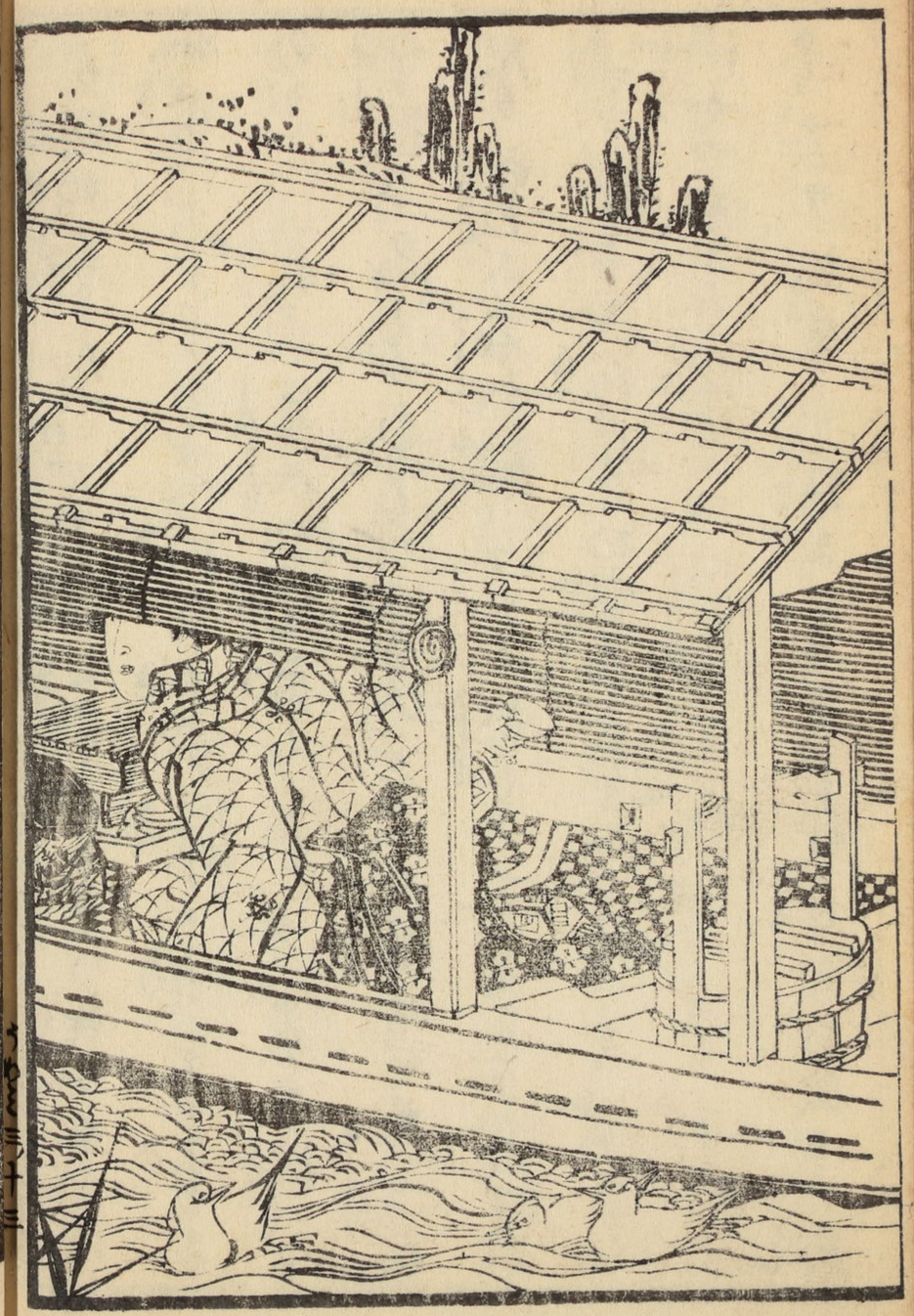
後を振向て真白なる歯をむき出して究竟ふと笑ひ
米「ヲヤ〳〵お前さん何も根生の悪ひ事を仕もしないのに
そんな手を揉る事をお言ひだヨ　お前が見が遅く何で肩〆て舞に
ヲホヽヽヽヽ　あさ「夫だつてもお前さんはサア夫から読ヨと
いふより早く秘を突除て先へ失む〳〵と舞にて引
出掛ゝ〳〵ト猪をさとりながら横だし一かゝる船頭二人
舟より上りあさの顔へ　舟「アヽモシおあぶなふ御座ります
お前そんな手揉する寛悦を致成ので[?]おつしやりますなサア〳〵

あさがひトいひつゝ米八娘者の手を引て舟の港棧の
際にゐる　あさ「サア米さんお這入な　米「アイアイお前さん先へ
お這入　あさ「ヲヤ何故さ　米「何時でもサト真中に成て
行て居る　あさ「アレサおつしやる事ヱ何故然して居るのだヱ
ヱ米さん　米「ナニ子供[?]見て居候と思ふ人があるからサ[?]
あさ「何を着るのだへ　光人[?]ハ何様でぶら〳〵して居る[?]
打捨てお出な　私やア先へ這入るヨト言ながら屋根舟の
屋根へちよつと手をかけて膝から先へ客の人這

入る米入ハ舟の表に立て居て米〳〵モウおもうてくヨウト
仰をろ気ふしておまをぐら あれも程なく〳〵舟へ這入る和
頭ハ宮根越ふ蘭の方へ行 揮ふて並び〳〵舟とゆ
ぐうのひろをまをく一人ハ宮根の用へ向ひ舟米
さん仰をまをよ肝腎をおあ〳〵成ふ渡うう元人え
のおを歳まで米 内両人でお楽〳〵米まをおを
分まをうう 米〳〵アイひうぐうヨウ仰宮早宮ふ今月ふ
碑で〳〵行ふハヨウまをぐらふ此碑〳〵まを春まをまをうヨ

ノウ胴胴ちぽん 「アイ然ナまをハ稼ぐ多ふ成
お米ハおまをるのぐ仰ぞまを薄るるまをと
のうと 国ハ米ハハ完市〳〵て 米〳〵ナナニ 仰も
まを稼ふ おまをぶあまをハ仕るひ ぐふト 笑ひて居る仰の
だう 宮ふ 米ふ 解ヨモウ 彩やナ又 おまを成ふハ
ヨヨウ米さん仰ぐう おまをる おまをつまをひふ 舟
両女でおまを早くお仕舞 玉成 米ぐ〳〵中〳〵〳〵
米〳〵ナニサ仰も まを稼ふ まをまをひるもひぐふ 丹





きんがみ　ぎ「エ　米「ひとつとまると　山所まで　まる
紙ぎくらす　ぎ「ヲヤ〜　然う久　実正にうねん茶さん
空言ぎくらう　米「イエ　実正サ　ぎ「ゑんぐろ空ら
あい指ぎよへエ　ゆう久　米「ア　トまるつて居る
ぎ「エ　下り　おまつて久　実正に　お言なるエ　米「ちれぐらん　支出覚
お茶も　おまるじやアあひうねん　ぎ「そまぐらつても　お茶が
おまつらい言指を　まるくらぐるな　実正じやア　ある
まひま　米「どんぐら　ぎ「そまぐ出覚る　剃おまさせる

指ゑ　ぎを　りよじやアあひうい久　米「お茶が　まぐ指ふ乳エ
まむくふ　言ふみ　ぎ「ア　米「実にる　ぎ「丹さんが
米「久　米「ゆぐぎョ　ぎ「そまアさ　おとうら
空ぐらふと思りさ　けまども　米「けまども　指が
ぐきく〜ふく久　ぎ「ナアニ　お茶じやア　ならるまひ
米「ヲヤ〜　言ぐる　まる身も　指が　然言りしらぶバ　顔
言言言言ふ〜て　おまつらぐるじやアあひう　ぎ「ア大
ゆふ　お言ぐョ　まさう　然でもまひふる　お茶まる又　ゆう

そんな事を御ぞうりやを言ひなさのごと　米「ナニまちがいと
ぐんぎ
丁寧に立て居て見てゐらばま新の人は此に丹さんは
やくそくを　して渡らう米て貴ひなさとも来てうけと
思ひなさうおあるとも　ぎうして貴ひとおもひ分て
然　言ふことのサ　ぎ「左程ゥまへ　まもうて人間保
御程も　実正でも　ちうと程さハ　米「ヲホ〜〜お安ご
終ごう　法ひねへ　ぎ「ナニノお茶ごうてもうとごうて
法ひ　癖ホ　米「そうやア　まこ似ときものハ　夫婦じゃア

ぎ「ハう　ぎ「然サ　おあと丹さんごハ　米「私ごうへまごハ
夫婦じゃア　ぎ「そうやア　夫婦の気で居る
けまごも　米「ア言ごまこ　夫婦の気ごまこのごハ
丹さんホ　言葉て　まホと思ひなさけまごも　ア遠来して
上程ホ　ぎ「ナニ　遠来して貴ハ　でも宜ニ遠来
為ひのまこハ　御程　米「丹さんの　代つた
新して　上ちょと　ちょいとこ　捨る　ぎ「アレサ　痛いヨ
おあが　然　まこと　仕方も　厭ア　ア　ア　私が

丹さんの代ごゝロ。

米〳〵ヲヤ〳〵若さま おさんの義を勝ぢ角左衛さんの

新ぢんぞ人達が行ものホ〳〵〳〵ホ〳〵〳〵アレサ

析角秋ゲ文吉に為らふと思ひ川こちら あの和ぶ言ふ

仕事ゝ行ふひョホ〳〵〳〵ト 和合同志が睦まく

宮初の腹〳〵引ゝて 如底尽の婦人張ふ意

地の俄ゝも解て ゝまぶ為ふ素人の女

人情ぢゝ〳〵 米〳〵 左様とおんまゝ為ぶ

ゝまゝ子工 ぢ〳〵ゝ子工ちゝと着てゝまふゝ

舟〳〵 おむゝの行て来ぢ せうゝ 米〳〵 行事然して

おゝ宜ふゝ 行ふて宜ふゝ 娘さんと

和人宮ホ辞て せうゝ 先へ行て舟に寝

んで居ると言て来さんざゝ 跡ぐ為ふて

探んで居るぢゝ舟〳〵 左様でどざる まゝゝ 和ゝ

ゝも大ゝホ 嘘〳〵ゝ 両人ぢゝおいゝ

芸門て 先へ来て 一眠入 待に ゝふゝと 所へ

お茶さん方の聲ぶあさうゝ御ぐゝ脈ぶ覺さのチ
お茶さん方も流人さんの寄るまで横に為りて
おまさの世人サアそゝて蜂を出さ為れ薬を拾げまさう
あまとをかゝ上るを又直に つゞけて春でも辟ん
はまさんゼ米〳〵ヲヲ〳〵ひりがうゝ梅の香るうくちやア
酒の毒消さん宮ふ姫ごゝ ゞゝドレ私も笑ふヤ
ヲヤ秋月ひどねん 舟〳〵サア お湯も二つ沸ましょ
ゞ米〳〵ひりがうゝ お茶より代梅の香紙 為て

お在ごっけま 舟〳〵そ 晩月やまうろ 御宴の 見邪ふ
お茶ひ やまうゝ 米〳〵ヤホンニ 浦義さんハえゝ 形達を
よ 見んで お茶ゞゞ 為ひねを ゞゝアくその 苦ず 流雲
人が さうまゞ ふ 対て 居るうんがうゝ 城主に 私き
達まで 見まる 揚うん 茶るひョ 米〳〵ドレ 笠 横に
ゝらゝヤ お茶 も お霧 物び なトちゝと 横よる 姫
娘 居も 横ふ 物び ゞゝ 茶さん ちまを ちゝ
梅ふ 兵 成ョ 房 在さんの 機 笠 ゆるョト 極く

太真遺傳

清製桐の箱入

上元女香

一朝

賣弘所

色白顔を増のごとく有り二品見ひまなく何様の荒症の細目を
細二重染のごとくに手津くとうすのとすべし。火気じ。そばつきて。撫で細
の外。老との気おしも滴すく消そようにくまとを膳食ん。わ好て艶を
洗ひその香糠気紙むう通ふるゝが出す白粉と能くる粘するゝ気をまて良い
自然春の泉の肌のかくうるしに粘まされい頭痕方いと字未及年追し進める
肌もひそき目にに塗ばして美くするな家法のもの治験ひあく追関しはふき良
真の美人となりかるべし

爲永春水精製

顔の艶をよくし
髪の毛をそろる
妙薬 初みやこ

なめらかすり ... 髪を ...

書物並繪入讀本所

江戸京橋弥左ヱ門町東側中程

文永堂 大嶋屋傳右衛門